

青花八宝文大合子
【重要文化財】
※ほぼ原寸大



大合子から見える 元青花の伝来

2023.1.17 tue. – 3.5 sun.

令和4年度重要文化財公開 首里城京の内跡出土品展

【観覧時間】午前9時 – 午後5時（入所は午後4時30分まで）【休所日】月曜日・建国記念の日・天皇誕生日

目 次

ごあいさつ	1
京の内とは	2
元青花とは	3
大合子に描かれた人物	4
大合子の用途	7
龍と鳳凰の高足杯	8
その他の元青花	10
元青花出土遺跡の分布地図	18
元時代のその他の陶磁器	19
コラム 金王朝の白磁がなぜ首里城に?	20
最後に	21
重要文化財指定基準・重要文化財指定の名称と指定理由	22
重要文化財 首里城京の内跡出土陶磁器指定一覧	23
首里城京の内跡閑連年表	24
参考文献・註釈・謝辞	25

【凡例】

1. 本図録は、令和4年度重要文化財公開『首里城京の内跡出土品展－大合子から見える元青花の伝来－』の展示を補完するものとして、編集・作成しました。
2. 展示会の運営は大城妃左緒・企画・原稿執筆は金城亀信・玉城綾・片桐千姫紀が行いました。また、本誌編集・デザイン等は、山城英莉が行いました。
3. 文化財保護・教育普及・学術研究を目的とする場合は、著作権(発行)者の承諾を得ずとも、本図録を複製して利用できます。ただし、利用にあたっては出典を明記してください。
4. 発掘調査報告書に記載されている資料名と本図録に記載されている資料名が一部異なる場合があります。これは新たな研究成果によって詳細が判明したことによるものです。

ごあいさつ

首里城京の内跡の発掘調査は、平成6(1994)年度から平成9(1997)年度にかけて実施されました。平成6年度の調査では、1459年の火災で焼失したと考えられている倉庫跡が発見され、中からは14世紀中頃から15世紀中頃の中国・東南アジア・日本で生産された膨大な量の貿易陶磁器が出土しました。

これらの陶磁器は、アジア諸国との交易によって独自の歴史・文化を形成した琉球王国の栄華を示し、我が国の歴史上意義深くかつ学術的価値の特に高いものとして、一緒に出土した金属製品やガラス玉とともに、平成12年6月27日付で国の重要文化財に指定されています。

沖縄県立埋蔵文化財センターでは、開所した平成12(2000)年以来、ほぼ年1回のペースで、これらの重要文化財を公開する「首里城京の内跡出土品展」を開催してきました。

19回目となる今回は、「元青花」に焦点を当てて展示を行います。「元青花」とは、中国元王朝(1271～1368年)を起源とする白地に青い文様が施された焼き物で、沖縄県内では、朝貢貿易のルートであった久米島や沖縄島の各グスクより出土しています。今回は、京の内跡から出土した、世界でも他に報告例のない「元青花八宝文大合子」の観察から導きだされた新たな仮説をたよりに、元青花と呼ばれる焼き物の伝来にせまります。

本展をご覧いただき、重要文化財「首里城京の内跡出土陶磁器」に対する皆様のご理解がより深まるとともに、本県の文化財の魅力や価値に興味を持つきっかけとなれば幸いです。

令和5年1月17日

沖縄県立埋蔵文化財センター
所長 前田直昭

京の内とは

首里城内は、政を司る正殿一帯と、国王のプライベート空間である御内原、聖域空間である京の内に大きく分けることができます。京の内は、首里城内の南西側を占める面積約5,000m²の区画を指します。

琉球王国の正史『中山世鑑』に記されている琉球
創世神話によると、天主に住む天帝の指示を受け
た創世神アマミクが辺戸の安須森から最良の聖地を
求めて南下しつつ、今帰仁ナカヒヤブ^{ナカヒヤブ}を
場^シとす^{シテ}、蘇敷^{スカフ}の浦原、玉城アマツツ^{アマツツ}、久高ボウハ森^{久高ボウハ森}
巡り、首里城^{シモリ}の里森^{シロイ}を^{シテ}、真玉森^{マタマツ}の御嶽^{ウタマツ}
を創設するとともに、琉球の島々をつくります。

京の内は、アマミクが最後に降り立った場所であり、琉球最高の聖域として認められた場所です。ここでの「京」は、靈力（セジ・シジ）と同義とされ

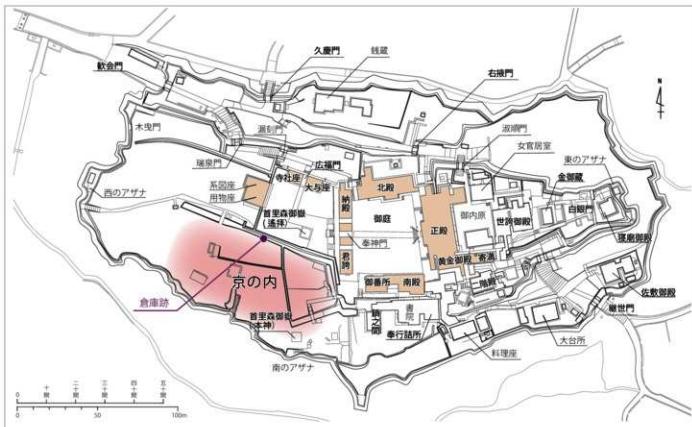


圖 1：英里城平面圖

元青花とは

元青花の“青花”とは、白地に青い文様が描かれた焼き物のことで、厳密には、白磁の胎土にコバルト顔料を使用して文様が施され、その後、釉薬をかけられて高温で焼成されたものを指します。

青花は中国元王朝(1271～1368年)が起源となり、現在の江西省景德鎮窯を生産地として世界へ広がった技法と考えられており、日本では「染付」、英語では「Blue and White (ブルー・アンド・ホワイト)」と呼ばれます。

青花の起源である元青花、それが世界で認識されたのは20世紀の前半でした。

ロンドンのディビッド財團が所蔵する「青花雲竜鳳凰文象耳瓶」と名付けられた焼き物（現在は大英博物館で展示中）に元王朝時代である1351年の記年があったのです。

その後、この瓶を基準として類例の研究が始まり、イスタンブールのトプカプ宮殿やイランのアルデビール寺院の所蔵品の中にも似たような焼き物があることが見出され、やがて世界へと広く認識されるに至りました。

文様の特徴は、器面をいくつかに区画し、その中を文様で埋め尽くすもので、如意頭文や蓮弁文が作り出す曲線、リズミカルに描かれた唐草文などは、イスラム世界のモスクにみられる装飾と似た雰囲気を感じさせます。

このことから元青花の文様は、アジア中近東諸国の影響を受けていると考える研究者もいます。

ユーラシア大陸の大半を占める大帝国を建設し、漢文化だけでなくヨーロッパやイスラム世界の文化も好んだモンゴル人による王朝ならではの特徴が表れているようです。

元青花は、東はアジア島嶼部から西は中近東を越え、ヨーロッパにまで広く流通していますが、確認されている量は他の時代の中国陶磁器と比べてとても少ないため、世界的にも大変貴重な焼き物として知られています。

驚くことに沖縄から出土する元青花の個体数³は、インドネシア、中国に統いて世界有数の量を誇っており、九州以北の日本国内と比べても4倍近くの個体数が確認されています。

さらに沖縄での出土は、朝貢貿易のルートで
あった久米島と琉球王国の拠点である沖縄島に
限定されているうえ、グスクを主体としている
こともわかつてきました。その中でも首里城から
出土した元青花の個体数は、今帰仁グスクや
勝連グスクなど他の大型グスクと比べても圧倒的
的な量であり、その保有量は、那霸港を整備し
て国際貿易を促進した中山王権の強大さの象徴
と考えて良いかもしれません。

※個体数

出土品の多くは割れてバラバラの状態です。その破片を形や文様、部位などを観察し仕分けていくことで当時、いくつ碗や皿などがあったかを算出した数。

大合子に描かれた人物

はじめに

重要文化財に指定されている元青花の大合子の蓋には複数の人物が描かれていますが、そのモチーフは何でしょうか。今年、当センターの専門職員の研究によってその人物の候補が浮かびあがってきました。これは新たな見解で、そのストーリーは元青花の伝来にまで繋がっていきます。

元青花はこれまでの研究で15世紀前半から中頃に明との貿易によってもたらされたと言われていますが、本展示会ではそれとは異なる視点で考えてみました。その点も楽しんでいただけると幸いです。

世界で1つの大合子

大合子は、蓋、仕切りが6つある中蓋、そして身の3つからなり、直径は30.4cmあります。

世界各地にある元青花の合子は直径約8cm、大きさでも約19cmであることから、京の内蔵から出土したものは類を見ない大きさで、世界に1つしかないと考えられています。

文様は人物文の他に、波涛文、菊唐草文や八宝文が描かれ、中蓋にはみられません。



写真1：重文 青花八宝文大合子

描かれた人物たち

出土した破片を見ると、蓋には男性1人、女性2人の計3人の人物が描かれています。

中央に描かれた男性

目は細く、口ひげと頬ひげが生えています。服装は宋式の内領（丸い衿元）の内面に前身ごろを交差させて、頭には元式の唐巾をのせています。そして、左右の肩辺りから線が出ており、それは円を描く日輪のように見えます。

向かって左側の女性（仕女）

顔は残っていませんが、小さく髪を結い、男性の方へ頭を傾けていることがわかります。服装は雲肩（ショール）を肩にかけているようで、文様と細かい装いのある百褶裙（ブリーツスカート）を着ています。大きな結節を持つ房飾りも着けています。そして、鱗の様な文様がある腰を手にもっていることから仕女とわかります。

向かって右側の女性

服の袖部分しか残っていませんが、服装や体の向きの違いから他の2人とは異なる人物（女性）が描かれていることがわかります。長い袖の裙は縁取られフリルのような蓮弁の装飾が施されています。

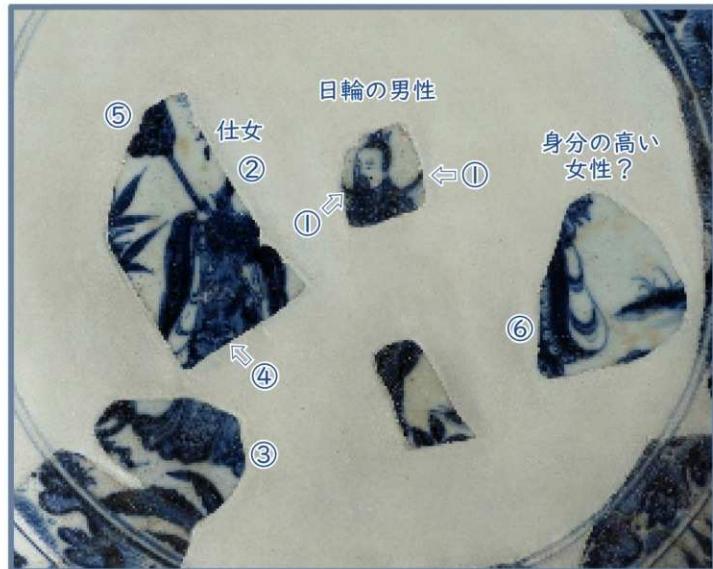


写真2：重文 大合子の蓋（一部拡大）

中央に描かれた男性

① 日輪

左側の仕女

② 右に傾いた頭

③ 百褶裙（ブリーツスカート）

④ 房飾り

⑤ 腰

右側の女性

⑥ フリルのような装飾のある袖

注目ポイント！

男性の左の肩辺りから伸びている線、これは、國主や皇子を表す日輪（太陽）と考えられます。すると、右側の女性は妃や公主（皇帝の娘）で、身分の高い夫婦が描かれているのではないかでしょうか。



日輪の男性は誰なのか

日輪の男性、それは元王朝第16代皇帝天元帝（トクス・テムル）の皇子（次男）地保奴（ティホヌ）と考えます。

地保奴は1388年4月に、后妃など約8万人余りと併に明の捕虜となり、その後、7月に明国内の事件を端に琉球へ配流となっています。そのことは明朝によって編纂された『明實錄』に細かく記載され、厚く下賜品を行い送ったとあります。また、琉球の歴史書である『中山世鑑』にも地保奴が琉球に送られたことが記されていますが、その後についての記載がなく、琉球でどのように過ごしたかはわかつていません。いずれにせよ、地保奴と共にやってきた下賜品が琉球にあり、それが大合子や龍文高足杯などの元青花ではないのでしょうか。

地保奴、配琉の記事

『明實錄』より
訳：中国天津工業大学主任教授 孫薇

原文 太祖實錄卷一九二

洪武二十一年七月癸酉朔

〔戊寅〕大將軍永昌侯藍玉遣人送虜主次子地保奴及后妃公主等至京。地保奴及后妃獻金印金牌、賜鈔二百錠、命有司給第宅廩庫、俾就居京師。既而有言玉私元主妃事、上怒曰。玉無禮如此、豈大將軍所爲哉、元主妃聞之、惶懼、因自盡。地保奴由是有怨言。

上聞之曰。朕初以元世祖。君主中國時。有恩及民。不可無嗣。嘗與儒臣議。欲封地保奴。以盡待亡國之禮。彼乃如此。豈可以久居内地。於是。遣至護送居琉球。仍厚遺賞遣之。

訳『太祖實錄』卷一九二

洪武二十一年（1388年）七月（癸酉）一日

戊寅（六日）、大將（将）軍であり、永昌侯である藍玉が、人を遣わし、捕虜となった主（元朝の最後の皇帝）の次男である地保奴、后妃、公主（娘）たちを都まで護送させた。地保奴と后妃が金印と金牌を上納したため、銭（お金）が二百錠、下賜された。また、衣食住の手配もできるよう、担当部門に命じ、（彼らを）都に落ちさせた。その後、藍玉がこの妃に通じていてるという噂が広がった。洪武帝（朱元璋）が怒り、いわく、藍玉がこんなにも禮（礼）をしないやつか。これは、大將軍のなされることか、と。この妃が、この話を聞き、おそれいり、自害してしまった。この事件のため、地保奴が不満を吐いた。

これを聞いた洪武帝（朱元璋）は、いわく、朕が、最初、元世祖（クビライ）が中国の君主としていた頃、御恩を民に押し広げたため、子孫をなくしてはいけないと想い、かつて、儒臣（文官の大臣）たちと話し合いを行い、その次男である地保奴を任命することを以て、亡國の禮にしようとを考えていた。彼（地保奴）は、このようなものであれば、内地（中国）に久らく、住ませていられるものか、と。すると、琉球に住むよう、琉球まで護送する人を遣わした。なお、下賜品を厚くおこない、遣わしていった。

地保奴の身元引受人は誰なのか

地保奴が配琉後にどのように過ごしたかはわかつていませんが、琉球側に身元引受人がいたはずです。それについて考えるために、当時の琉球と中国との関係についてみてみましょう。

琉球は各地の按司たちが北山・中山・南山の元にまとまっていた三山時代で、明は冊封政策のため諸国外へ使者を送っていました。1372年に使者（梯轄）が中山の察度の元に送られ、中山はそれに答えるように入貢し、いち早く冊封体制に加わります。それに続き、1380年に南山の察度、1383年に北山の伯尼芝も朝貢を行います。朝貢に使う船は、明からの貸与か賜ったもので、まずは中山が先に船を手にいれ、その後南山も船を得たと考えられています。この船を得るまで南山や北山の使者は中山の船に便乗していたとも考えられています。それもあってか、朝貢回数をみてみると中山が突出しています（表1）。

そして、この朝貢には中国の渡来人が重要な役割を担っておりました。中山王察度の王相も務めた亞蘭砲は1382年には進貢副使も務め、朝貢へ行った回数は10回を数えます。これらのことから、地保奴の身元引受人は力のあった中山の察度と王相亞蘭砲であった可能性が高いと考えます。

表1：三山の朝貢

	朝貢回数	朝貢開始年
中山	65回	1372年
南山	27回	1380年
北山	15回	1383年

『球陽』によると察度王代の1392年に「數丈の高樓を建造して以て遊観に備ふ」という記録があり、この高樓（高世層理）が首里城にあったと考えられています。発掘調査成果でも14世紀前半にはグスクとして機能していたことや、京の内地区の南側高台から高世層理と考えられる遺構も確認されています。もし、察度王が首里城にいたのであれば、地保奴の下賜品は首里城もしくはその周辺の臣下（王相）屋敷に保管され、その後は中国から渡來した閥人三十六姓が代々管理を担っていたと考えられます。

ちなみに、首里城の築城時期がどこまで遡れるかについては、文献から『球陽』にある1392年に察度の建立した高世層理説と『安國山樹花木之碑記』（1427年）による尚巴志が城域を整備した記載による説の2つが現在有力です。

大合子の用途

大合子は、形が似ている東道盆（とうんだーぼん）のように食べ物を盛り付けるオードブル皿とも考えられますが、実は別の用途も考えられるのです。

そのヒントとなるのが、白地に黒い文様を描く焼き物で、宋代の白釉黒花蓮池文盒（直径21.8cm）です。京の内の大合子に比べ少し小さいですが、その蓋に「鏡盒」と書かれており鏡を入れていたと考えられています。そのことから、中蓋の仕切りに白粉・紅・黛などの化粧品を入れ、その下に鏡を入れた化粧箱だった可能性があります。

京の内から出土した大合子の蓋の文様が身分の高い男女が描かれていることから考えると、妃への婚礼祝いとして特別に作ったものかもしれません。

龍と鳳凰の高足杯

元青花の生産について

『元史』によると 1278 年、景德鎮には朝廷直属の各工業製品などを管理する将作院の下に磁器生産のための浮染磁局が設置されたそうです。その他にも画局があり、そこで青花の文様が描かれたと考えている研究者もいます。

龍と鳳凰の高足杯

別名、馬上杯ともいいう高足杯。首里城からは龍文と鳳凰文が出土しています。

元では、龍や鳳凰は権力の象徴で、1270 年には官営工場以外では「日月電鳳」の織物を生産してはいけないなどの禁令を出しています。龍に至っては、その後も庶民の服に見られていたことから何度も禁令が出され、そのことが影響してか「五爪双角（5つの爪と2つの角を持つ龍）」が皇帝専用と決まったのも元時代です。このことが陶磁器生産においても適用されたかはわかりませんが、五爪龍が描かれた元青花の出土例は、河南省の明周惠王墓や明時代の官窯からも出土していますが、とても稀です。京の内跡出土の龍文の高足杯は三爪ですが、爪の数は違う文様は同じであることや、元が磁器生産を管理していたことから、王宮内で使う御器と考えられます。

元青花龍文高足杯〔首里城 京の内地区出土〕

京の内の倉跡から出土しており、世界各地で 20 点しか確認されていません。外面上には三爪の龍と火焔文が型紙を使用して描かれ、内面には不明瞭な印花雲文と底には 8 花弁が描かれています。類例としては、朱元璋と共に南北戦を戦い明建国後にその功績から官職を与えられた、汪興祖の墓などから出土したものがあります。

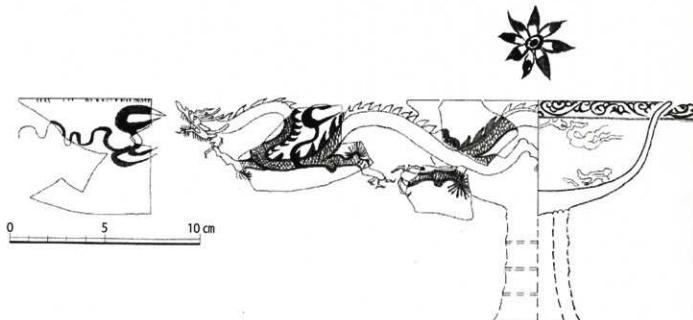


図 3 : 重文 元青花龍文高足杯 (出典:『亞州古陶瓷研究Ⅲ』2008 年)

元青花鳳凰文高足杯〔首里城 二階殿地区出土〕

鳳凰文は首里城から 3 点出土しています。

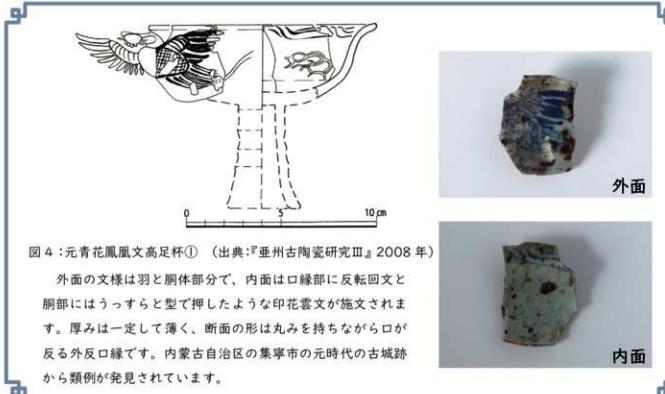


図 4 : 元青花鳳凰文高足杯① (出典:『亞州古陶瓷研究Ⅲ』2008 年)

外面上の文様は羽と胴部部分で、内面は口縁部に反転回文と胴部にはうっすらと型で押したような印花雲文が施されます。厚みは一定して薄く、断面の形は丸みを持ちながらが反る外反口縁です。内蒙古自治区の集寧市の元時代の古城跡から類例が発見されています。

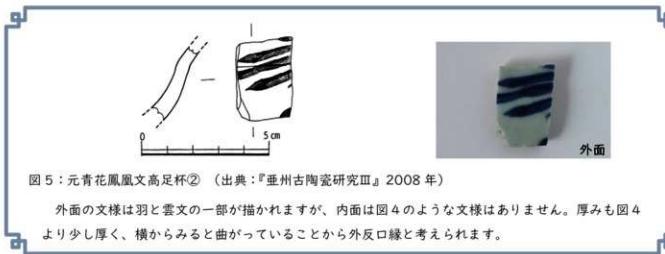


図 5 : 元青花鳳凰文高足杯② (出典:『亞州古陶瓷研究Ⅲ』2008 年)

外面上の文様は羽と雲文の一部が描かれますが、内面は図 4 のような文様はありません。厚みも図 4 より少し厚く、横からみると曲がっていることから外反口縁と考えられます。

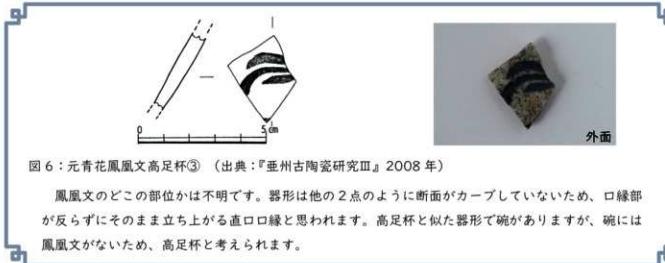


図 6 : 元青花鳳凰文高足杯③ (出典:『亞州古陶瓷研究Ⅲ』2008 年)

鳳凰文のどの部位かは不明です。器形は他の 2 点のように断面がカーブしていないため、口縁部が反らずにそのまま立ち上がる直口縁と思われます。高足杯と似た器形で碗がありますが、碗には鳳凰文がないため、高足杯と考えられます。

その他の元青花

沖縄県内出土の元青花

亀井明徳氏を研究代表とした専修大学アジア考古学チームが、国内外で元青花の調査をしています。その調査成果によると、元青花は沖縄県では主にグスクから出土していることがわかりました。

しかも、出土しているグスクは、有力按司や琉球王国などの姻戚関係があるところです。このことから、琉球王府は渡来中国人が保管していた元青花を、对外交渉の材料や褒美などとして与えたり、さらに日本本土への交易品として利用した可能性が考えられます。

ここでは、重要文化財ではありませんが境内で出土した代表的な元青花とその出土遺跡を紹介します。

表2：沖縄県内の元青花個体数（亀井明徳ほか 2009年、新島奈津子 2016年に加筆）

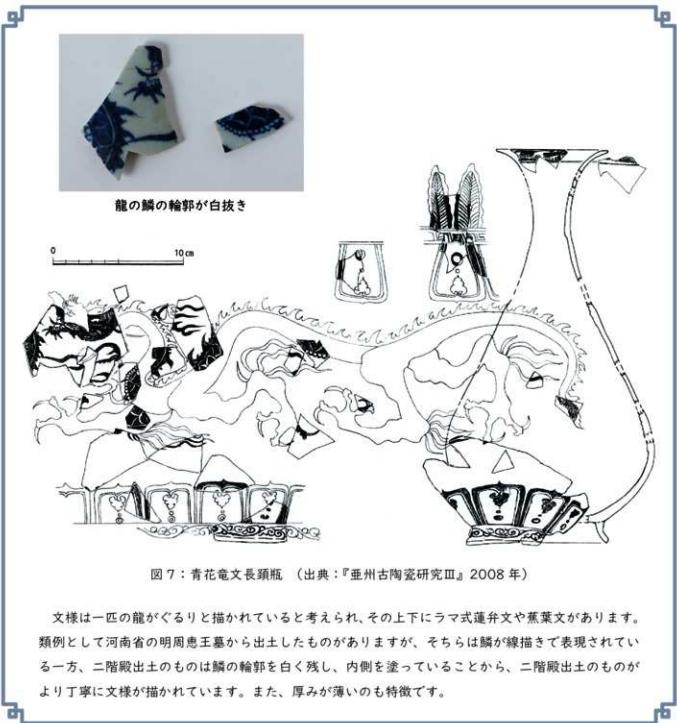
遺跡名	器種	合計	罐 (適合量) (大皿)	盤	鉢	皿	碗/杯	高足杯	梅瓶	長頸瓶	番炉	薔薇台	盆 (合子)	略描体
①首里城跡		67	14	24	2	1	10	3	3	7	1	1	1	
②円覚寺跡		1		1										
③具志川城跡		5	2						3					
④宇江城城跡		1					1							
⑤大城城跡		1	1											
⑥浦添城跡		1					1							
⑦北谷城跡		1	1											
⑧勝連城跡		8	2	3	2					1				
⑨辺碁タキンチャ掘込墓		1	1											
⑩今帰仁城跡		15	7	3			1		1	1	1		1	
合計		101	28	31	4	1	12	4	4	12	2	1	1	1

表3：元青花出土の遺跡と琉球王府との関係

遺跡名	琉球王府との関係
首里城跡	琉球王国の王城。県内で最も多く元青花が出土している。
円覚寺跡	第二尚氏王統の菩提寺。
具志川城跡	1500年、オヤケアカハチの乱の鎮圧のため、王府から招聘された君南風（ちんべい）は奇策をもって勝利に貢献し、祭祀組織の三十三君に取り立てられる。
宇江城城跡	
大城城跡	大城按司の娘は尚巴志の祖母。
浦添城跡	首里城へ遷都したことにより、出土数が少ないと考えられる。
北谷城跡	中山勢力の有力按司の居城。
勝連城跡	勝連按司の娘は察度の妃。阿麻和利の妃は第一尚氏尚泰久の娘。
今帰仁城跡	北山として中山の船に便乗し朝貢へ行った。その際の利益分配もあったと考えられる。 尚巴志に滅ぼされた後は、やんばる地域監視のため監守が置かれる。

首里城跡二階殿地区ほか（那覇市）

元青花は首里城内のいくつかの地区で出土が確認されていますが、中でも目立つのは京の内地地区と二階殿地区です。二階殿とは1765年に創建され、正殿の南奥にあり国王の日常の居間・書院として使われていた建物です。その構造は地形に合わせて北側では二階建てで南側は平屋になっており、この二階建てというところに名前の由来があります。その二階殿地区的発掘調査において、岩盤が低くなっている部分（落込み遺構）から13世紀末～15世紀前半の中国産やベトナム産の焼けた大量の陶磁器が出土しています。首里城内で最も多く元青花が出土しているのがこの落込み遺構で、すでに紹介した鳳凰文の高足杯もここから出土したもののです。



文様は一匹の龍がぐるりと描かれていると考えられ、その上下にラマ式蓮弁文や蕉葉文があります。類例として河南省の明周惠王墓から出土したものが有りますが、そちらは鱗が線描きで表現されている一方、二階殿出土のものは鱗の輪郭を白く残し、内側を塗っていることから、二階殿出土のものがより丁寧に文様が描かれています。また、厚みが薄いのも特徴です。

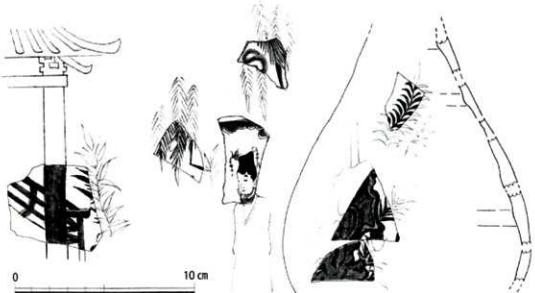


図 8：青花柳樹人物文長頸瓶（出典：『垂州古陶瓷研究Ⅲ』2008年）

女性が笠や柳の生えた東屋にいるような文様の瓶です。描くものによって青の濃淡を使い分けています。よく見ると、女性の頭には鳥の髪飾りがあります。イギリスのヴィクトリア＆アルバート美術館に類例があります。

円覚寺跡（那覇市）

円覚寺は第二尚氏尚真王代 1492 年に竣工し、1494 年に完成した第二尚氏の菩提寺です。

当時、禅宗僧が明や朝鮮、日本などの外交も担っており、海外交易拡充のため大規模な寺院が建てられています。円覚寺もそのような状況下のなか建立されました。

首里城の北側に隣接しており、1933(昭和 8)年に国宝に指定され、その後の沖縄戦では全ての建物が消失しています。現在は建物などの復元整備が進められ、総門はすでに完成しております。

その円覚寺跡からは盤が 1 点、地表面で採取されています。

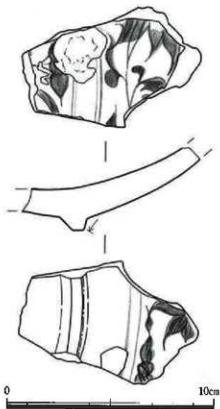


図 9：青花蓮池文盤

具志川城跡（久米島町）

久米島の北側にある具志川城跡は 15 世紀頃に築城されたと考えられ、交易船が碇泊していたと言われている大和沿岸に面した場所に立地しています。文献によると、島外から来た真達勃按司が御獄であったその地に築城し、その後 16 世紀初頭に中山軍に滅ぼされてしまいます。そして、具志川城から逃げた按司が現在の糸満市喜屋武に同じ名前の城を築いたと言われています。

具志川城跡には 4 つの曲輪があり、その中でも城の主殿があったと考えられる二の曲輪から多く元青花が出土しています。種類は壺や瓶などが出ています。図 10 の壺は今帰仁城跡からも出土しており、文様構成やその描き方までとても似ていることから、同じ窯でつくられたと考えられています。

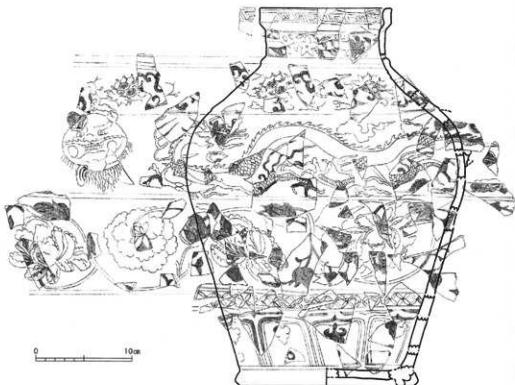


図 10：青花雲竜牡丹唐草文双耳罐（出典：久米島町教育委員会 2005年）

宇江城城跡（久米島町）

久米島で最も高い宇江城岳に築かれたグスクです。

発掘調査の成果から 14 世紀後半から 15 世紀前半の遺物が集中して出土しており、久米島の他のグスクに比べ青磁の出土量が多いです。

元青花と考えられる高足杯が一郭から 1 個体出土しています。

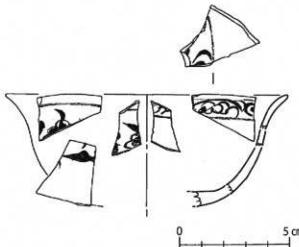


図 11：青花花唐草文高足杯（出典：『垂州古陶瓷研究Ⅲ』2008年）

うぶでぐ 大城城跡（南城市大里）

現在の大城集落の後ろにある小さな丘陵に立地し、その周囲は谷や雄種川があります。丘の頂上部は狭いながらも平坦地があり四方が崖になっており、それに沿って石積みが築かれていました。伝承によると、玉城按司の次男である大城按司真武が築き、島添大里按司によって滅ぼされたとされています。出土した青磁の年代を見ると14世紀中葉から15世紀中葉です。

元青花は壺が1個体出土しており、花びらの先は色を淡くし蕊は白く残して描かれた大きな牡丹唐草文は印象的です。伝承によると島添大里城との戦の際に、王妃らが敗戦を勘違いし自らグスクに火を付けたそうで、元青花を含め陶器の多くも熱を受けた状態で出土しています。

うらせき 浦添城跡（浦添市）

舜天・英祖・察度王統の拠点で首里城へ移る前の王城でした。考古学的調査から13世紀末から14世紀初頭に築城されたと考えられています。首里城遷都以降に一度、廃城となります。第二尚氏尚真王の不興をかった長子・尚維衡が浦添城へ還っています。その後、1609年の薩摩侵攻の際に浦添城は城下の龍福寺と共に焼失てしまい、近世になると集落祭祀の場となっています。元青花は碗の1個体が出土していますが、浦添城跡からの出土が極端に少ない理由は、首里城へ移る際に一緒に持っていたとも考えられます。

ちゃくじん 北谷城跡（北谷町）

字大村に位置し、標高約44m

の丘陵に立地しています。築城についての明確な記録はありませんが、言い伝えによると金満按司・大川按司・谷茶按司の三つの按司系統が興亡を繰り返し、最終的には首里城を中心とする王権へ組み込まれていったと言われています。金満按司と大川按司については、近年の北谷町教育委員会の家譜調査などにより、ある時期において同一視されていることがわかっています。

元青花は三の曲輪の北西部から出土しています。このエリアは陶磁器類や鐵鏃、石弾のほかイネ、オオムギ、コムギ等も出土しており、倉庫や物見台などがあった可能性があります。

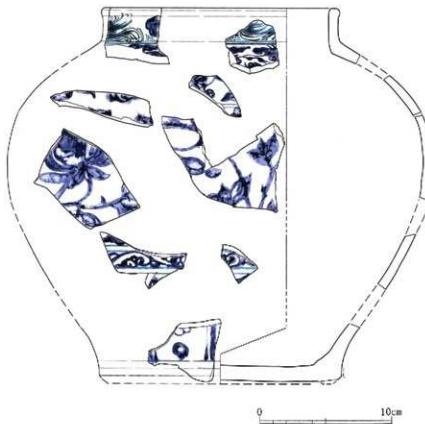


図12：元青花壺（出典：北谷町教育委員会 2020年）

かつれん 勝連城跡（うるま市勝連）

標高60～100mの琉球石灰岩の丘陵上につくられたグスクで、13世紀頃から城塞化していくと考えられています。9代目按司のときに、圧政を敷き酒におぼれた按司を人々の信頼の厚い加那（のちの阿麻和利）が倒し10代目按司となります。

阿麻和利は琉球国内でも大きな権力を有していましたが、1458年に中城按司の護佐丸を倒し、その後首里城を攻めますが王府軍によって討ち滅ぼされてしまい、勝連城は廢城になったと言われています。その後は17世紀頃まで祭祀の場として利用されていました。元青花は壺や盤、鉢、瓶が主郭の北西部に集中し出土しています。



図13：元青花魚藻文盤（出典：亜州古陶瓷研究Ⅲ』2008年）

内底の鱗魚と水草文が印象的な盤です。その周りには白抜きで法相華唐草文を描き、あいた余白は細かい柳目で埋められています。県内では首里城跡から類例が出土しています。

楚辺タキンチャ堀込墓（読谷村）

14・15世紀から17世紀まで使われていたと考えられる崖を掘り込んだ墓から、高さ37.0cm底径17.3cmの壺が出土しました。壺は底に穴があけられた痕跡があり、蔵骨器として使用されていたことがわかつています。文様は三爪の龍が描かれ、額に「王」と描かれた獅子形の耳がついています。

今帰仁城跡（今帰仁村）

言わずとしれた北山がこの今帰仁城で、その支配領域は沖縄本島の北部地域と奄美大島近隣まで広がっていきます。約100 mの丘陵に立地し、その東側は約70 ~ 80 mの深い谷で志慶真川が流れ、西側の谷筋にはタキンチャガラが流れています。築城は13世紀代で、1416年（1422年の説もある）に中山の尚巴志に滅ぼされてしまいます。その後は中山の子弟や重臣を監守に命じ北部やんばる地域を管理させます。この監守体制は1665年の制度廃止まで続きますが、薩摩侵攻の際の従軍日記から実質的な廢城は監守引き上げよりも早い1609年頃であったと考えられています。

今帰仁城からは2006年時点での破片が423点（うち個体数は15点）出土し、盤、壺、小型畫、瓶、碗、香炉、蓋など様々な器種があり、首里城に次いで多いです。今帰仁城跡内では主郭や志慶真門郭から出土し、志慶真門郭出土のものは主郭の破片と同一個体である破片も多く、本来は主郭にあったものだと考えられます。また、今帰仁城跡周辺の屋敷跡や旧道などからも出土していることは注目すべき点です。

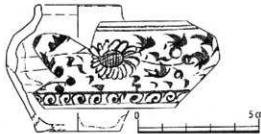


図14：青花菊唐草文小壺
(出典：今帰仁村教育委員会 1983年)

大きさは口径3.7 cm、底径3.5 cm、高さ5.2 cmの小型の壺で、蓋付と考えられます。文様は菊唐草文で、輪郭を描きその中を塗るような施文方法（グミ塗り）をしない略描型式と言われています。この型式は、フィリピンや東南アジアでよくみられるもので、沖縄では今帰仁城跡のみで出土しています。



写真3：青花刻花白竜文罐
(写真提供：今帰仁村歴史文化センター)

大きさは、口径19.1 cm、底径17.8 cm、高さ29.1 cm、胴部の最大径34.1 cmです。最も特徴的な部分は文様で、龍文は色をのせず白抜きで、外形や鱗を彫りによって表現していることです。龍の周囲も波涛文がびっしり描かれており、この龍文帯の上には繊細な線で馬が描かれています。この壺について、亀井明徳氏は「我が国はもとより、中国を含めて内外の青花瓷の白眉」と評価しております。類例として、エジプトのフスタート遺跡から破片（出光美術館所蔵）が出土しています。

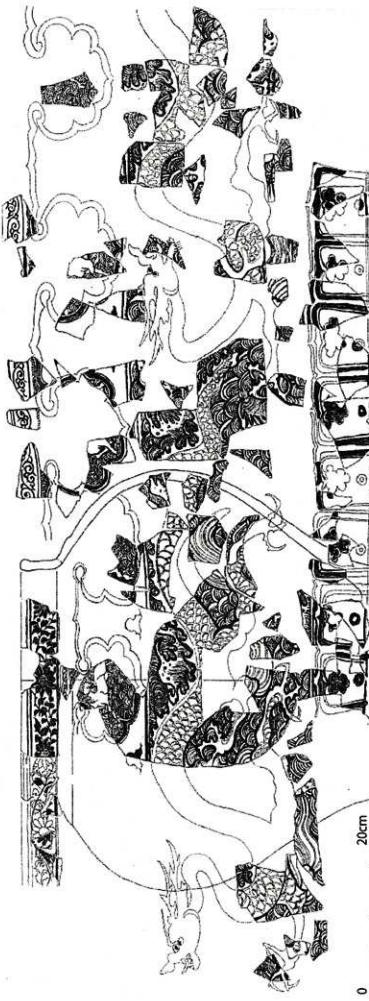
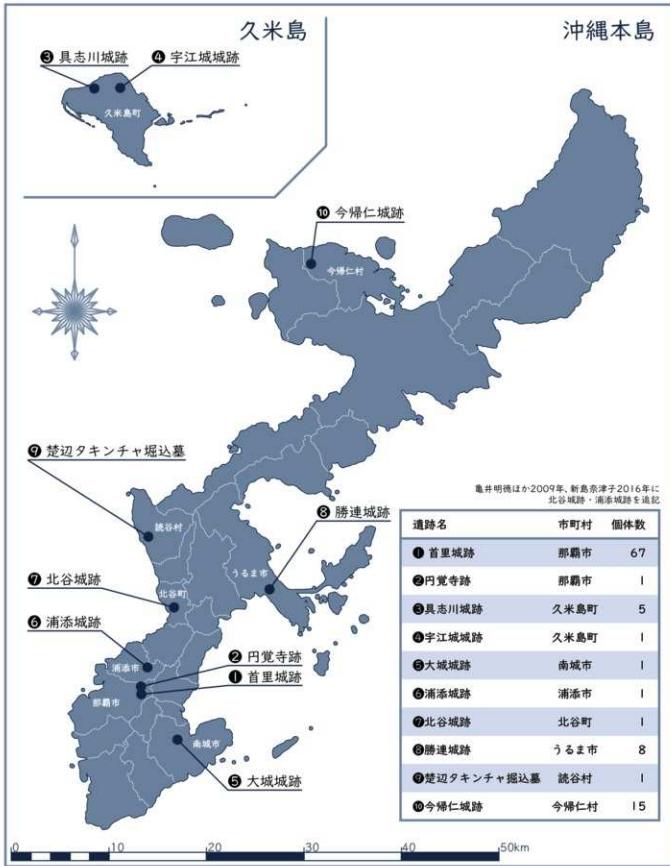


図15：青花刻花白竜文罐（出典：『垂竹古陶瓷研究III』2008年）

元青花出土遺跡の分布地図



元時代のその他の陶磁器

重要文化財に指定されている陶磁器のほとんどは明時代のものが多いですが、元時代のものも少し出土しています。

まずは景德鎮窯の製品です。磁器生産の管理機関である浮梁磁局があった景德鎮ですが、元時代になると様々な種類の陶磁器を生み出します。元青花もその一つですが他には、釉薬の下に施文し焼き上げるとその文様が赤色に発色する釉裏紅や、藍色に白抜きで文様が描かれる藍地白花などがあります。京の内からは紅釉水注や枢府白磁が出土しています。

また、龍泉窯で焼かれた青磁では、底の部分の盛り上がった双魚文が特徴的な小皿などがあります。



写真4：重文 紅釉水注



写真5：重文 枢府白磁碗

こうゆう
紅釉水注

全体に赤茶色の釉薬がかかった紅釉の水注は、国内では1点しか確認されていません。

この紅釉水注の他に瑠璃釉の水注も出土しておりますが、この2点は対になると考えられています。

すうじふ
枢府白磁碗

良質な磁石を用いた白磁で、京の内跡から1点出土しています。京の内出土のものは火災により表面が変質してしまっていますが、枢府白磁の特徴は、器に厚みがあり釉薬はやや青みがかり、胎土が白いことです。

コラム 金王朝の白磁がなぜ首里城に？

京の内の重要文化財に、金¹¹王朝期（1115～1234年）の河北省曲陽県定窯（以下、定窯）の白磁杯があります。

これは、ヘラのような道具で表面を彫ってのびやかに蓮花を描いています。厚みは薄く、口の部分に釉薬がないことが特徴です。口の部分に釉薬がないのは、一度に多く焼くために、伏せて積み重ねたことによるものです。器自体の厚みが薄いこともあり、釉薬が無い口の部分には補強と装飾のために金や銀などの金属の輪っか（以下、金環）が付いていました。京の内からはその金環は見つかっておりませんが、丁寧に作られた様子がうかがえます。

定窯は宋時代隨一の窯ですが、その後の金の時代まで続いたと考えられています。もしかしたら、元が金に攻め入ったときに手にした戦利品なのかもしれません。ならば、この白磁杯も地保奴と共にやってきたのでしょうか。

註：金は中国東北部（満州）から北にかけての地域を支配した女真族の王朝です。
17世紀には満州族（女真、または女直）として清王朝を建国します。



写真6：重文 定窯産の白磁杯（12世紀中頃～13世紀中頃）



注目ポイント！

口の部分（四角枠内）は、釉薬がかからっていないので素地が見えています。

写真7：白磁杯の内側

最後に

元青花大合子の人物を25年間、探し「地保奴」と推定

金城亜信（当センター職員）

1998年刊行の京の内跡発掘調査報告書I²¹で、元青花龍文高足杯について、矢部良明氏の研究から高足杯が世界に20点あり、元王朝の御器²²と記した。21点目の高足杯が京の内跡から出土したことで、中国明朝から「琉球王国」へ下賜されたとした。また、元青花大合子の外観や中蓋の構造から琉球漆器の東道盆²³の原形の一つとし、蓋に描かれた人物を特定するまでは至らなかった。その後、京の北側に隣接する下之御庭一帯の発掘調査報告書（2001年）が刊行²⁴され、京の内跡出土の陶磁器片と接合可能な陶器片が多数確認された。2009年刊行の京の内跡発掘調査報告書II²⁵の原稿執筆前に京の内跡出土の陶磁器と下之御庭一帯出土の陶磁器との接合や図上復元をおこなった。その中で、元青花龍文高足杯や大合子などを含む下之御庭一帯出土の新規破片資料を追加・修正した復元図を掲載した。特に、大合子の男仕を中央に配置し、男性の両肩から延びる途切れた細めの曲線を日輪と見なしして描き直した。日輪が付加された人物として、皇帝・皇太子・地方の國主などを考えた上で、中国明朝の「明實錄」²⁶から太祖實錄 卷1921 洪武21年（1388年）7月の項に「虜主次子地保奴及后妃公主等至京（略）遣至護送住居琉球 仍厚遺資遣之。〈大意：捕虜となった次男地保奴、后妃、公主（娘）たちを都まで護送させた。〉（略）琉球に住むよう護送する人を遣わした。下賜品を厚くおこない、遣わした。」との記載があり、琉球に「地保奴」が多く下賜品（地保奴らの私物を返却）を得て、流罪にされた記録から、大合子の人物は元朝第16代皇帝の皇子（次男）「地保奴」（今から634年前の人物）と判断し、彼の所有物の一つが元青花龍文馬上杯を考えた。

また、元青花大合子と大合子の人物に関する研究で、亀井明徳氏は地元紙（2001年3月27日）に「この大型の元青花合子は、わが国や中国の出土例はもとより、世界の美術館でも一点も存在しない、きわめて珍しいものである。」²⁷とした。人物については、柏谷一明氏が「この形態の青花大盒の類例は探しえない（略）蓋の上面に描かれた人物文の類例は探し難かった。（2002年）」²⁸とする。次いで新島奈津子氏は、大合子を「青花人物文盒」（2008年）とし、その用途は中蓋の6区画に白粉、紅、黛などの化粧品を入れ、下段に鏡を収納した「鏡盒」とするも、人物は特定していない。但し、復元の参考資料として、男性は元代の山西省右玉宝寧寺の文人画を、女性が西安韓森寨元墓壁壁画仕女図²⁹をあげている。さらに杉谷香代子氏の「元代青花磁器と絵画資料の比較・モチーフの採用に関する試論」（2017年）³⁰には、参考文献として京の内跡発掘調査報告書Iの記載はあるものの、大合子の人物についての記述はなかった。

以上のように大合子の人物は、今まで特定されていなかったことや、亀井氏が「（略）元青花合子は、わが国や中国の出土例はもとより、世界の美術館でも一点も存在しない、（略）世界的にも例のない珍品。」としたことなどから、元青花高足杯（元王朝の御器）の所有者は「地保奴」で、大合子に描かれた男性も「地保奴」（県内最古の人物画）と推定した。恐らく、皇帝や皇后から婚礼祝い用に特別注品として、合子の蓋に「地保奴と妃」・仕女の三人を描かせて景徳鎮の宮廷専用窯で焼成されたとみられる。「地保奴」所有の下賜された多くの品々は首里城内に保管され、その代表的なものが元青花（67個体+α）ではないかと考えられた。

重要文化財指定基準

考古資料の部

重要文化財

- 一 土器、石器、木器、骨角牙器、玉その他縄文時代及びそれ以前の遺物で学術的価値の特に高いもの
- 二 銅鑄、銅劍、銅鋒その他弥生時代の遺物で学術的価値の特に高いもの
- 三 古墳の出土品その他古墳時代の遺物で学術的価値の特に高いもの
- 四 宮殿、官衙、寺院跡、墓、経塚等の出土品その他飛鳥・奈良時代以後の遺物で学術的価値の特に高いもの
- 五 渡来品で我が国の歴史上意義が深く、かつ、学術的価値の特に高いもの

※国宝及び重要文化財指定基準、(中略)・基準(抄) 昭和 26 年 5 月 10 日文化財保護委員会 告示第 2 号【最終改正】
平成 8 年 10 月 26 日文部省告示第 185 号より一部抜粋。

重要文化財指定の名称と指定理由

考古資料の部

名称及び員数： 沖縄県首里城京の内跡出土陶磁器 518 点

附 一、金属製品 一括
附 一、ガラス玉 一括

所 有 者： 沖縄県（沖縄県立埋蔵文化財センター保管）

序保美第 3 の 3 号 平成 12 年 6 月 27 日付「重要文化財の指定について」
文化庁次長より沖縄県教育委員会教育長あて通知により作成

説 明 文： 尚氏第一王統時代

本件は、沖縄県那覇市首里当蔵に所在する首里城内郭の南西部にあたる、京の内跡の建物跡から出土した陶磁器の一括である。

「京の内」は靈廟のある聖域という意味があり、なかに存在した首里森御嶽は琉球王国の最高神女である間得大君が神を迎えて、歴代の琉球国王に託宣を下した拝所である。

この京の内跡の発掘調査は国営沖縄記念公園首里城地区整備事業の一環として、平成 6 ~ 7 年度に実施され、約 2000 平方メートルが調査された。その結果、この建物は天順 3 年（1459）に焼失したことが判明した。

出土した陶磁器は、中国産の青磁、白磁、明代の染付を中心に、元代の染付、色絵、褐釉陶・磁器、瑠璃釉・紅釉など、タイ産の褐釉陶器、ベトナム陶器、日本の備前陶器等で構成されている。これらは概ね 14 世紀中頃から 15 世紀中葉のものである。なかでも紅釉水注は、北京の故宫博物院に 2 点と景徳鎮窯跡出土の破片 1 点が確認されているのみである。また、元染付の合子は遺存する部分は少ないが、わざわざ貴重な出土例である。

また、中国産の陶磁器を中心に、タイ、ベトナム、日本などアジアの主要な陶磁器の生産地から交易によって集められたものが出土している。

琉球王国は首里城正殿前につられて「万國津梁錦」の銘文に「船舶を諸国と結ぶ小橋とすることによって異国の宝物類が國中に充満する」（訳文の趣旨）とあるように、中継貿易で栄えた琉球王国の繁榮ぶりを如実に示す貴重な一括資料である。

なおこの建物跡からは、兜鉢、小札、鎖帷子、釘、鍔等の金属製品、火災の際に溶着したガラス小玉塊が出土しており、あわせて保存を図りたい。

文化庁文化財保護部監修『月刊文化財』平成 12 年 6 月号より抜粋

※官報告示：平成 12 年 6 月 27 日付 文部省告示第 120 号

※文化財保護法（昭和 25 年法律第 214 号）第 27 条第 1 項の規定により、平成 12 年 6 月 27 日付けて重要文化財に指定。

指定番号 考第 536 号

沖縄県首里城京の内跡出土陶磁器

518 点 沖縄県

附 Ⅰ. 金属製品 一括
Ⅰ. ガラス玉 一括

陶磁器内訳

青磁	碗	103 点	皿	117 点
	盤	32 点	壺	20 点
	花瓶	1 点	馬上杯	1 点
	水注	3 点	瓶	5 点
	香炉	3 点	水滴	1 点
	花盆台	1 点	大鉢	1 点
白磁	碗	14 点	皿	11 点
	杯	2 点	水注	1 点
	壺	1 点	瓶	4 点
元染付	馬上杯	1 点	合子	3 点
明染付	碗	32 点	皿	4 点
	杯	3 点	鉢	1 点
	瓶	14 点	壺	4 点
色絵	碗	2 点	皿	1 点
紅釉	水注	1 点	瓶	1 点
瑠璃釉	碗	1 点		
褐釉磁器	碗	1 点		
褐釉陶器（中国産）	壺	30 点	水注	1 点
	鉢	1 点		
	特殊壺	1 点		
白釉陶器	壺	2 点	水注	1 点
褐釉陶器	蓋	1 点		
褐釉陶器（タイ産）	壺	55 点		
半練土器（タイ産）	蓋	18 点	壺	4 点
ベトナム陶器	瓶	1 点	水注	2 点
備前	擂鉢	1 点	甕	3 点
	壺	2 点		
その他（沖縄産か）	蓋	5 点		

首里城 京の内跡 関連年表

参考文献

- アサヒ讀記『人海舟時代の琉球』沖縄タイムス社 1988年

亀井邦子・高島裕司・新島奈津子・山本文子『亞洲陶窯研究Ⅱ』『中国出土の元青花瓷資料集成』2005年
東費 輯編『中國の陶器 第三巻 白磁』平凡社 1998年

杉山正邦・北川誠『世界の歴史 大きなシルクロード』中央公論新社 2008年

北川町教育委員会『北谷城—続城壁研究書』一谷市文化財調査報告書第44集 2020年

田名直久『古琉球の久米村』『「琉球」史 古球珠編』琉球新報社 1993年 5版

山口哲郎・中ノ堂一弘・弓場紀祐『アジア陶芸史』昭和堂 2001年

京国博立別館編『美輪美奂の中国陶磁』2018年

中富島魯士・長谷川洋子編『中国の陶磁 第8巻 元・明の青花』平凡社 1995年

今柳仁村教員会『今柳仁城跡発掘調査報告書Ⅷ—今柳仁城跡外郭発掘調査報告書5—』今柳仁村文化財調査報告書第37集 2020年

新島奈津子・高島裕司・山本文子・亀井明徳『亞洲古陶窯研究Ⅲ』『元青花瓷出土遺跡 04沖縄県那覇市首里城二重闕跡』2008年

新島奈津子・元青花をめぐる古琉球 安土桃井位置をめぐる—『中近世 陶器の考古学 第三巻』2016年
古窯研究所・門上秀穂『琉球陶器考古学的研究』真理閣 2011年

註釈 (『最後に』より)

1. 金城信重・上島・静雄・城間 達也「首里城跡一京の内跡発掘調査報告書(Ⅰ)」沖縄県文化財調査報告書第132集 沖縄県教育委員会 平成10(1998)年

2. 矢部良明「元染付「陶磁大系」」第41卷 平凡社 1980年

3. 前田孝次「道楽盆」『築城器物の表記的内容』中国から見たじき食うう籠の一種。中国語で「東」は主人を意味し、「東道」はおにぎりと一緒に主役を意味するところから、お客様接待するときにごくぞうを盛る盆のこと。(略)『沖縄大百科事典』沖縄県立図書館 1983年

4. 城間 達也・浜袋 逸、琉球 朝邦「首里城跡一京の内跡発掘調査報告書(Ⅱ)」沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第3集 2001年

5. 金城伯信「首里城跡一京の内跡発掘調査報告書(Ⅰ)」沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第49集 平成21(2009)年

6. 中國・朝鮮の書籍における「日本史料集成眞寶之部」日本史料集成編纂会 株式会社国書刊行会 1989年

7. 亀井明徳「首里城跡の内服によせて / 貿易陶磁器から見た交易時代」3新領域開く力強さ / 世界でも珍しい一品「元青花大合子」琉球新報 2001年3月27日 火曜日 17面

8. 亀井明徳・斎藤正津子・高島文之助・斎藤圭子主編 専修大学アジア考古学チーム「九州古陶窯研究Ⅲ」日本出土の元青花陶磁資料集 古墳考古学会2008年

9. 横谷一郎「334・335(?)青花人物花文大鉢 / 亀井明徳 p5「青花盒」「明代前半期陶窯窯の研究一首里城跡の内跡SK01出土上品」専修大学アジア考古学研究会報告書 2002年

10. 杉谷香子「元代青花器と磁化器と磁化資料の比較 -モチーフの採用に関する試論 -」貿易陶磁研究 第37号 日本貿易陶磁研究会 2017年

謝辞

本図録に掲載しました『明實錄』(洪武21年7月癸酉の記事は、孫薇(天津工業大学主任教授／中国第一局 史档案館 研究員) 氏に訳文の作成を依頼しました。また、図録掲載の実測図や出土品の詳細な観察内容は、国内外で多くの元青花について調査研究をなされた龜井明徳氏を研究代表とした専修大学アジア考古学チームの資料(図面・写真)を保管・管理をしています専修大学 教授 高島裕之より資料掲載の許可を、そして元専修大学アジア考古学チームの新島奈津子さんからは、元青花の分析等でご教示をいただきました。併せて、今帰仁城跡出土の元青花の写真掲載については、今帰仁村歴史文化センター館長 玉城靖氏、北谷城跡出土の元青花の掲載については、北谷町教育委員会 文化課 山城安生・東門研治・松原哲志の三氏の協力をいただきました。明記して感謝の意を表します。



青花八宝文大合子
【重要文化財】

【文化講座】

◇日時：2月5日(日)

午後2時－3時20分（受付：午後1時30分）

◇講師：金城 龜信（当センター職員）

◇題目：元青花大合子に描かれた元王朝第16代皇帝の皇子「地保奴」

◇場所：沖縄県立埋蔵文化財センター 研修室

◇受講料：無料 ◇定員：66名

【文化講座申込期間】

◇日時：1月24日(火)～27日(金)／1月30日(月)～2月2日(木)

午前9時－午後5時

◇申込方法：電話受付のみ

098-835-8752（調査班／普及担当）



沖縄県立埋蔵文化財センター

休所日

月曜日（国民の休日・敬老の日の場合は翌平日に振替） 年末年始（12/28-1/4）

国民の休日（ごどもの日・文化の日を除く） 敬老の日（6/23）その他臨時休所あり

開所時間
9:00～17:00（入所は16:30まで）

住所
沖縄県中頭郡西原町字上原193-7

電話番号
098-835-8752 / 8751
web サイト
沖縄県立埋蔵文化財センター

無 料

FREE